文書館収蔵文書展

関東管領上杉氏と埼玉の戦国武将

埼玉県

彩の国
埼玉県

開催にあたって

室町幕府によって東国の統治機構として鎌倉に置かれた「鎌倉府」には、足利尊氏の子である基氏が初代の「鎌倉公方」として入りました。以後、五代にわたって鎌倉公方は関東を統治しますが、この鎌倉公方を補佐したのが「関東管領」です。関東管領は幕府の将軍から直接任命され、上杉氏が代々その職を歴任しました。その後、鎌倉公方と関東管領は敵対関係に進展し、両者が争った「享徳の乱」が起こります。この乱を契機に関東は動乱の戦国時代を迎え、県内の戦国武将もこの争いに巻き込まれていくことになります。

戦国時代に活躍した上杉家の名刀が会する、県立歴史と民俗の博物館の特別展「上杉家の名刀と三十五腰」の開催と関連して、本展示では、関東管領上杉氏と埼玉県ゆかりの戦国武将に関する文書を中心に展示し、本県と関東管領、そして上杉氏との関わりについて描写します。

現在、文書館は大規模改修工事のため、御迷惑をおかけしておりますが、二つの展示をあわせて観覧いただくことで、歴史と文化の奥深さに触れていただければ幸いです。

平成29年11月
埼玉県立文書館長

【第1部】関東管領上杉顕定の時代

Ⅰ 関東管領と享徳の乱

鎌倉幕府を打ち倒した足利尊氏(1305－1358)は、京都を本拠地において室町幕府を開きました。その一方、武家政権の祖である源頼朝が幕府を置いた鎌倉は依然として武士の間では大きな地位を保っており、また、東国には強力な武士勢力が多く割拠していました。

そのため、尊氏は京都とは別に鎌倉にも統治機構を置き、東国全体の統括を任せることにします。これを「鎌倉府」と呼び、その初代統治者に息子の基氏(1340－1367)をあてました。基氏の子孫は代々鎌倉府の長を務め、京都の将軍に対して「鎌倉公方」と称されます。この「鎌倉公方」の補佐役として設置されたのが「関東管領」です。

京都の室町将軍とその補佐役である管領に並び、鎌倉府にも鎌倉公方と関東管領がおかれたことで、「鎌倉府」はまさにもう一つの幕府として機能しました。鎌倉府の次席であった関東管領は室町将軍によって任命され、鎌倉公方の代行を務めたほか、室町将軍との折衝、東国守護への指令通達など、大きな権力を有しました。

この関東管領を代々務めたのが上杉氏です。なかでも上杉氏宗家であった山内上杉氏は、初代の上杉憲顕(1306－1368)から憲政(1523－1579)まで、代々関東管領を世襲しました。そして、関東管領は、上杉氏の名跡とともに、越後国守護代の長尾景虎(上杉謙信　1530－1578)へと継承されたのです。

No.1　足利義満御内書（上杉家文書複製）
第3代将軍足利義満が、山内上杉憲方（安房入道道合）を関東管領に任命した際の文書です。

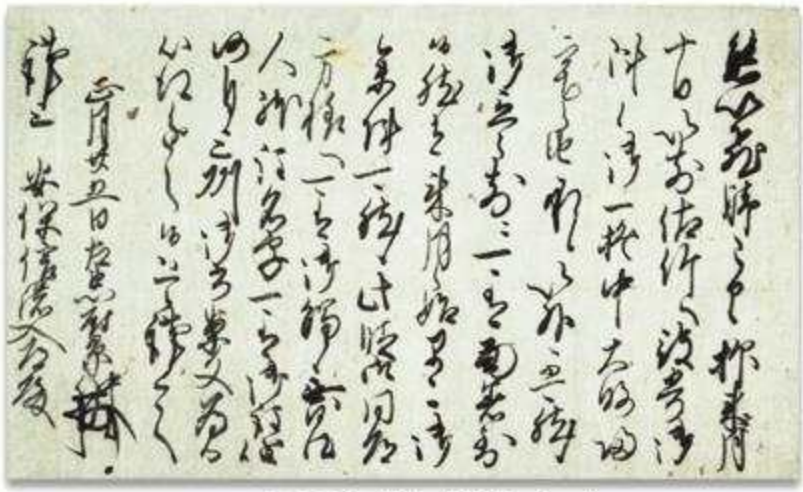
さて、鎌倉公方は初代基氏、2代氏満、3代満兼と続くうち、次第に反幕府的な態度を示すようになりました。4代持氏（1398－1439）の代になると、関東管領であった上杉憲実（長棟　1410－1466）とも反目し、永享10年（1438）、遂に幕府に反旗を翻します（永享の乱）。

反乱は、室町幕府6代将軍足利義教と上杉憲実とによって鎮圧され、持氏は自害に至り、ここに鎌倉公方は一旦断絶します。

永享12年（1440）には持氏の遺児を擁立した遺臣らが結城城に拠って蜂起します（結城合戦）が、彼らも上杉氏と幕府の追討軍によって制圧されました。

この合戦は、武蔵国の在地領主を巻き込み、賀美郡安保郷（現神川町）を本拠とした安保氏も参陣した領主の一人です。上杉憲実からの参陣・激励の書状（**「No.3　上杉長棟（憲実）書状」**）とともに、上杉氏の家宰（重臣）であった長尾景仲から安保宗繁へ出された書状から、安保氏が上杉方の指揮下で尽力したことが伺えます（**「No.4　長尾景仲書状」**）。

No.3　上杉長棟（憲実）書状（安保文書 15）



No.4　長尾景仲書状（安保文書 17）

結城合戦の終結に伴い、持氏の遺児を巡る騒動も終結に向かうかと思われましたが、室町将軍足利義教が暗殺される嘉吉の乱（嘉吉元年・1441）が勃発すると事態は急変し、持氏の遺児であった万寿王丸が関東足利氏の家督相続を宣言します。室町幕府は事態の沈静化と関東の安定化を図るため、その家督相続を認め、万寿王丸は鎌倉公方として鎌倉に帰還を果たしました。万寿王丸は宝徳元年（1449）に足利成氏を名乗り、関東管領には上杉憲実の子憲忠が就任しました。しかし、鎌倉公方足利成氏と上杉氏の権勢に危機感を抱いていたその家臣団は、やがて上杉憲忠との対立を引き起こしました。

そして、享徳3年（1454）、遂に鎌倉公方足利成氏は憲忠を謀殺します。これをきっかけに、鎌倉公方成氏方と関東管領上杉方とが関東を二分して争った、「享徳の乱」が起こります。

憲忠を暗殺した後、成氏は各地で上杉方と交戦し、後に、下総国古河城（現茨城県古河市）に拠点を移してからは「古河公方」と称されました。一方の上杉方は憲忠の後継者に弟房顕を擁立して室町幕府に救援を求めたため、幕府は室町将軍足利義政の弟である政知を新たな鎌倉公方として関東に派遣し（鎌倉には入れず伊豆堀越に留まったため、「堀越公方」と呼ばれた）、成氏には追討の綸旨（天皇の意思を伝える文書）が出されます。朝敵となった成氏は、室町幕府が定めた新たな年号を用いず、一貫して「享徳」の年号を用い続けるなど、引き続き幕府方との対決姿勢を顕わにしました。

古河に本拠を置いた成氏に対し、上杉方は武蔵国五十子（現本庄市）に陣を構えて対抗、両者は東上野、武蔵の各地で合戦を繰り広げました。対決の舞台となった北武蔵の諸将の動向は重要視され、幡羅郡（現熊谷市北部及び熊谷市東部）に勢力を持っていた玉井・長井・別符氏らの所領の差配に関する書状が遺されています（**「No.6 足利成氏書状」**）。

No.6　足利成氏書状（別符文書複製）

戦の最中、上杉房顕は嫡子を残さずに若くして病没してしまい、その後継者には越後守護であった上杉房定の子・顕定（1454－1510）が選ばれました。

若くして関東管領となった顕定でしたが、家臣の長尾景春が鉢形城（現寄居町）で反旗をひるがえし、本陣の五十子陣が急襲されるなど窮地に立たされます。そのため、古河公方成氏と室町幕府との停戦を条件として、文明10年（享徳27年・1478）に和睦を成立させます。そして、顕定の父房定の奔走もあり、上杉氏の仲介によって室町幕府と古河公方との交渉が進み、文明14年（1482）に正式な和睦（都鄙の和睦）にこぎつけました。

こうして、約30年に亘って関東各地で繰り広げられた享徳の乱は一応の終結をみました。

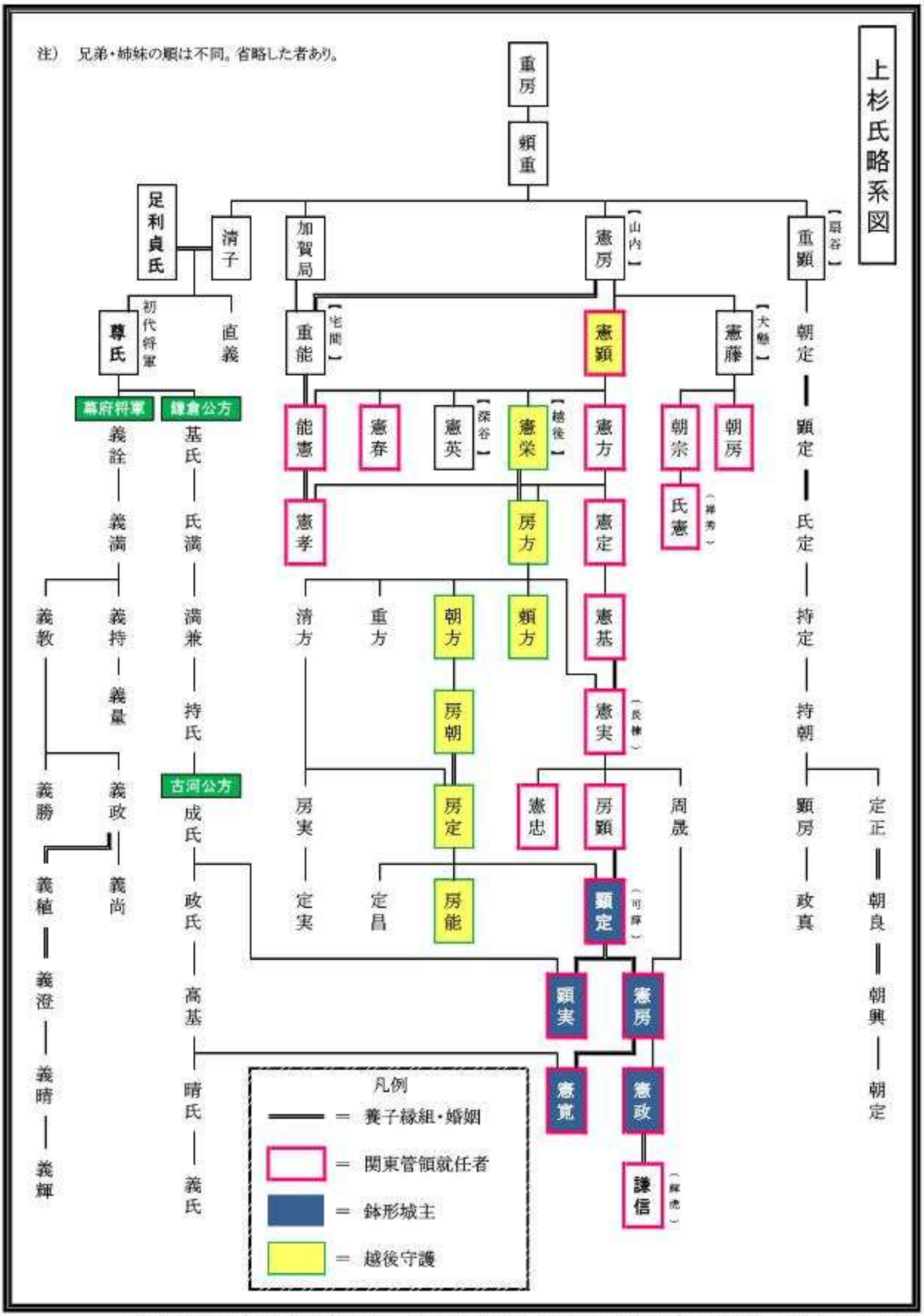
上杉氏について

上杉氏は、もとは藤原北家勧修寺流を出自とし、京都で地下官人を務める家柄でした。宗尊親王が鎌倉幕府６代将軍に就任するにあたり、供奉した藤原重房が丹波国の上杉庄を賜って以後「上杉」を名乗ります。足利尊氏の母清子は重房の孫にあたり、縁戚関係にあった足利氏を助けて活躍したことから、上杉氏は鎌倉公方を補佐する関東管領に任命されるなど、関東を拠点に目覚しく活動します。

当時、上杉氏は諸家に分かれ、それぞれ鎌倉の本拠の地名を取って「山内上杉氏」「犬懸上杉氏」「扇谷上杉氏」「宅間上杉氏」と称しました。諸家のうち、初代関東管領となった憲顕の直系として嫡流を担った「山内上杉氏」が、関東管領をほぼ独占して大きな位置を占めました。他方「宅間上杉氏」は早くに衰え、また「犬懸上杉氏」も応永23年（1417）の「上杉禅秀の乱」で敗れたことにより衰亡したため、この乱の後は、「山内上杉氏」と「扇谷上杉氏」の間で主導権が激しく争われました。

上杉氏には、ほかにも「山内上杉氏」から分かれた「深谷上杉氏」、越後国守護を務めた「越後上杉氏」などの諸家がありました。特に「越後上杉氏」は永享の乱を鎮圧した憲実、享徳の乱を収めた顕定の父・房定を輩出しました。また越後上杉氏の下で守護代を務めた長尾氏からは、後に関東管領とともに山内上杉家の家督を相続した、長尾景虎（のちの上杉謙信）が登場します。

上杉憲実坐像
（新潟県 雲洞庵蔵）



※鉢形城歴史館 平成25年春季企画展『鉢形城主 上杉顕定』図録所収の系図を一部改め、転載した。

Ⅱ　山内・扇谷上杉氏同族の争い　長享の乱

享徳の乱は収束しましたが、新たな対立が山内上杉氏と扇谷上杉氏との間で起こります。都鄙の和睦において主導的な立場を担った山内・越後上杉氏に対して、扇谷上杉氏は大きく反発し、関東の主導権を巡って両者は互いに反目します。

享徳の乱における長尾景春の反乱鎮圧のために奮戦し、扇谷上杉氏の勢力拡張に大きな功績を挙げた人物に、扇谷上杉氏の家宰太田資長（道灌）がいます。主家のために尽力した道灌でしたが、逆にその功績による勢望を主人である上杉定正（1443－1494）に恐れられ、讒言によって文明18年（1486）に誅殺の憂き目にあいます。

山内上杉顕定は、この事件を扇谷上杉氏の分裂とみてすぐに行動に移ります。時に長享元年（1487）、「長享の乱」とよばれる上杉氏同士による抗争の幕が切って落とされます。

山内方には上杉顕定の実家である越後上杉氏が加勢、また功臣を誅殺した主人を見限った扇谷方の家臣も参陣します。一方、扇谷方は、旧敵であった古河公方足利政氏（成氏の子）、長尾景春らと結んでこれに対抗します。

山内上杉氏は鉢形城、扇谷上杉氏は河越城（現川越市）を拠点としましたが、長享2年（1488）に起こった相模国実蒔原（現神奈川県伊勢原市）の合戦を境に、両者は本格的な戦闘に突入します。埼玉県内でも須賀谷（現嵐山町）、高見原（現小川町）で大規模な合戦が繰り広げられました。

戦局は一進一退となりますが　明応3年（1494）に上杉定正が荒川渡河に際して落馬して没すると、それまで扇谷上杉方と手を結んでいた古河公方足利政氏が離反したため、山内上杉氏が優位となりました。定正の後、朝良が家督を継いだ扇谷上杉氏は、駿河の今川氏親・伊勢宗瑞（北条早雲）らに支援を求め、一時は立河原の合戦（永正元年・1504）で顕定らの軍勢を破るなどの戦果を収めますが、永正2年（1505）には顕定の実弟房能（1474－1507）が率いる越後上杉氏の増援を受けた山内上杉方から総攻撃を受けました。河越城を包囲された扇谷上杉方はこれに抗しきれず、両者の間に和睦が成立します。これにより、約20年にわたって続いた上杉氏同士の争い、「長享の乱」は終結しました。

ようやく関東に一応の平安をもたらした上杉顕定でしたが、永正4年（1507）には実弟である越後国守護上杉房能が越後守護代長尾為景（謙信の父　1489－1543）らに攻められ、死に追いやられます。そのため、顕定は永正6年（1509）に軍を起こして大挙越後に出征することになりました。一旦は越後の大半を手中に収めた顕定でしたが、翌永正7年には為景方からの反撃を受け敗走、途上の長森原（現新潟県南魚沼市）にて戦死します。

顕定は、越後上杉氏から山内上杉氏に入って関東管領に就き、以来40数年間の長きにわたって同職を務めました。

No.8　上杉顕定書状（文書館収集・赤堀文書2）

上杉顕定から、相模国実蒔原の合戦にて勲功を挙げた家臣の赤堀上野介を賞賛して与えられた書状です。

【第２部】関東管領上杉憲政の時代

Ⅰ　揺れる古河公方家と関東管領

上杉顕定の活躍によって、永正2年(1505)に山内・扇谷の両上杉氏が争う「長享の乱」は終結しましたが、その裏で古河公方家内部に新たな抗争の火種が燻っていました。

古河公方であった足利政氏と、子の高基との間で公方家の権威回復の方針を巡って不和が生じ、永正3年(1506)には高基が下野の宇都宮成綱のもとに出奔する事件が起きました。このときは関東管領であった上杉顕定の仲介によって事なきを得て和解に至ります。しかし、仲介者であった顕定の越後出兵、そして敗死という事態に直面すると、政氏・高基父子は決定的な対立に至ります。

№12　上杉憲房感状（安保文書 25）

古河公方家内で対立が起こる一方、戦死した上杉顕定の跡目を巡って、山内上杉氏内でも相続争いが勃発します。顕定には嫡子がなく、憲房(1466－1525)と顕実(政氏の弟　？－1515)の二人の養子がいましたが、当初跡目を継いで関東管領に就任したのは顕実でした。それに反抗した憲房が足利高基と結んだことで、「足利政氏－上杉顕実」と「足利高基－上杉憲房」という二つの陣営のもとで激しい争いが起こります(永正の乱)。

№13　足利高基感状（安保文書 26）

武蔵の領主も参陣し、安保郷の安保氏に伝わる文書では、上杉顕実方の小俣城(現栃木県足利市)攻めの功績に対して、上杉憲房、足利高基からそれぞれ感状が発給されており、同陣営の下で安保氏が奔走していたことがわかります(**「№12　上杉憲房感状」「№13　足利高基感状」**)。

永正9年(1512)、憲房によって顕実が籠る鉢形城が攻め落とされると、顕実は兄である政氏を頼って古河城に落ち延びましたが、足利政氏もまた祇園城(現栃木県小山市)の小山成長を頼って古河城を出奔したため、実質的に、古河公方家は足利高基によって、山内上杉氏の家督は憲房によって継承されることになりました。

関東管領となった憲房は、永正12年(1515)に高基の子憲寛を養子に迎えて、足利氏との親密な関係を築こうとしました。古河公方と関東管領との間で関係修復が図られる一方で、足利高基の弟義明(？－1538)が「永正の乱」の最中に下総の小弓城(現千葉県千葉市)に入って「小弓公方」を称して自立するなど、未だに戦乱と混迷の時代が続いたのです。

Ⅱ　北条氏の侵攻と河越合戦

山内・扇谷上杉氏、古河公方家がともに内紛で衰退していくなか、関東には新たな勢力が侵攻してきます。なかでも大きな影響力を持ったのが、伊豆国に一大勢力を築いた小田原北条氏です。

小田原北条氏は、伊勢宗瑞（北条早雲　1432－1519）が、延徳3年（1491）に足利政知の子で第2代堀越公方となっていた茶々丸を追放して、その勢力を確固としたものにしました。

山内・扇谷の両上杉氏が相争った「長享の乱」では、扇谷上杉氏の支援要請に応じて宗瑞はたびたび出兵、永正元年（1504）には扇谷上杉朝良の要請により駿河の今川氏親（宗瑞の甥）とともに参陣して、上杉顕定らが率いる山内上杉方を立河原の合戦にて打ち破っています。しかし、一方で明応4年（1495）には扇谷上杉氏の小田原城を手中に収めるなど、虎視眈々と関東への進出をもくろみ、永正13年（1516）には相模国を勢力圏に収めます。

宗瑞から家督を継いだ北条氏綱は、大永4年（1524）に扇谷上杉氏の江戸城を奪取、一方の上杉氏も扇谷方（朝良の子朝興）と山内方（憲房）とが連合して北条方に相対しようとしましたが、足並みが揃わず、逆に翌5年には太田資頼が守備する岩付城（現さいたま市）が陥落します。

大永年間から徐々に武蔵に進攻する北条方に対して、扇谷上杉朝興らも、越後国守護代の長尾為景に対して関東救援を強く要請するなどの策を講じましたが、残念ながら実現しませんでした。いま、その時の書状が上杉家文書に伝えられています（**「No.16　上杉朝興書状」**）。

No.16　上杉朝興書状（上杉家文書複製）

北条氏綱と上杉氏は、この後も氏綱の没する天文10年（1541）までの長きに亘り、葛西城、白子原、蕨城、河越城、岩付城、松山城など、各地で戦いを繰り広げました。

一進一退の攻防が続くなか、北条氏綱の子氏康（1515－1571）が当主の座につきます。上杉方でも、関東管領が山内上杉憲寛（？－1551）から憲政（？－1579）へと移り、扇谷上杉氏では朝興が没して子の朝定（1525－1546）が跡を継ぎました。

しかし、若年の朝定が家督を継いだのを好機とした北条氏の攻撃により、天文6年（1537）に扇谷上杉方の居城河越城は落城します。

河越城奪還に執念を燃やす朝定は、古河公方足利晴氏、関東管領山内上杉憲政らに助力を願い、天文14年（1545）に8万騎とも言われる大軍で河越城を包囲します。氏康の義兄弟であった城代の北条綱成のもと、河越城はわずか3千余人の守備兵ながら堅く守られ、籠城戦は半年間に及びます。

No.18　太田道可（資頼）判物（道祖土家文書１）

太田道可が同氏に長年仕えた川島の道祖土氏の功に報いるべく所領を宛がっています。太田氏は、上杉方の重臣として活躍しました。

No.21　上杉憲政安堵状（文書館収集・赤堀文書1）

本書状は、河越合戦によって戦死した赤堀上野守の娘に対して名代職を安堵しています。敗戦後の家臣団の離反を防ごうとする意図が窺えます。女性に宛てたものであるため、仮名で書かれています。

翌年、自ら救援に向かった北条氏康でしたが、手勢はわずかに8千騎を数えるのみでした。世に「河越夜戦」とよばれるこの合戦で、上杉陣営は、この戦いの主導者とされる難波田弾正（憲重）が討ち取られるなどさんざんに打ち破られました。山内上杉憲政は上野国の平井城（現群馬県藤岡市）まで敗走、そして、扇谷上杉氏の当主であった朝定も急死し、扇谷上杉氏は滅亡します。

この「河越合戦」の結果、武蔵の大半が北条氏の勢力範囲となりました。敗れた関東管領上杉憲政の衰退は著しく、天文21年（1552）には関東平野から山内上杉氏の勢力は一掃され、憲政は越後の長尾景虎（のちの謙信　1530－1578）を頼って身を寄せることになりました。

埼玉の戦国武将

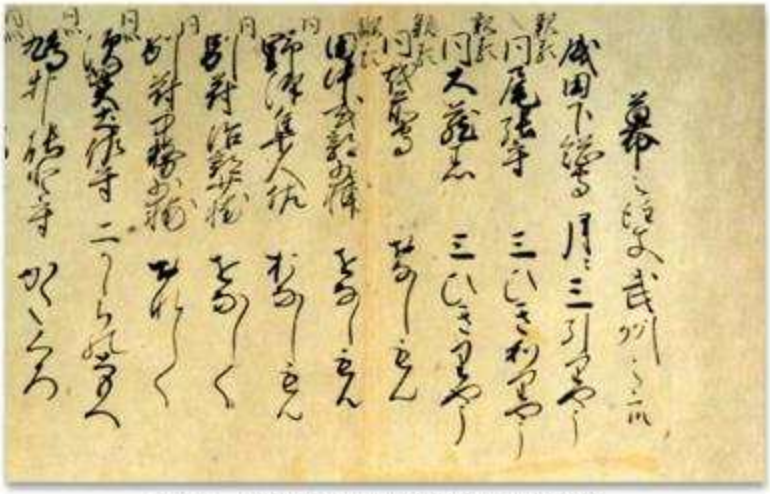
上杉方と北条方との間で主導権争いが繰り広げられるなか、武蔵国各地に割拠していた諸将達は絶えずその趨勢を注視していました。北条氏の家臣団を書き上げた「小田原衆所領役帳」（役帳）には、「他国衆」として太田資正（三楽斎道誉）、上田朝直（安独斎宗調）、成田長泰ら埼玉の戦国武将が含まれています。ところが、上杉謙信の関東出兵に際して、出陣に応じた武将を列挙した「関東幕注文」の中にも同じく太田資正、成田長泰らの名前がみえています。このことから、彼らは自身の領地を守るために巧みに立場を変えていたことが窺えます。

No.26　太田資正感状（道祖土家文書4）

岩付城主太田氏は、扇谷上杉氏の家宰として活躍した道灌（資長）を祖とします。当初は扇谷上杉氏の重臣として反北条の立場でしたが、河越合戦前後に太田全鑑（資顕）が北条氏康に帰属します。その一方で、全鑑の弟資正は上杉方を支えます。資正は、一時期やむなく北条氏の下に服属していたことが「役帳」から伺えますが、一貫して反北条の立場を堅持しました。永禄7年（1564）に子の氏資によって岩付城を追放された後も、佐竹氏、織田信長、豊臣秀吉らの間を立ち回り、北条氏からの岩付城奪還のために活動しました。

Ⅲ　長尾景虎から関東管領上杉輝虎へ

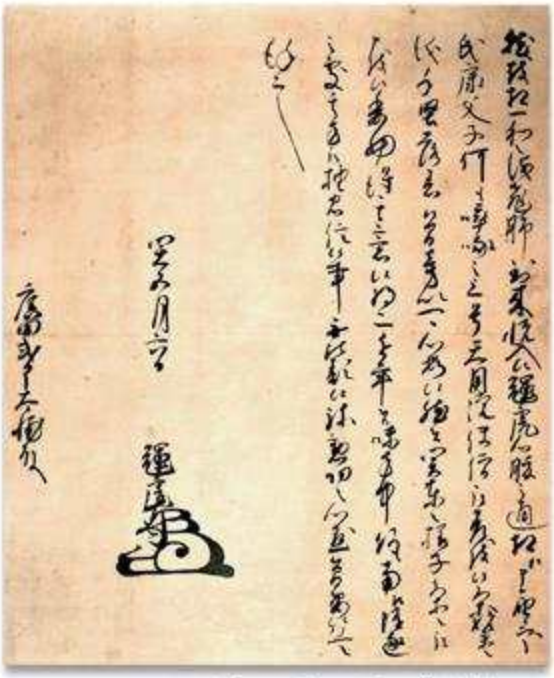
河越で北条氏康に攻められた関東管領山内上杉憲政は、越後に逃れて越後国守護代長尾景虎の庇護を求めます。そして、小田原北条氏打倒と家名再興を条件として、山内上杉氏の名跡と関東管領の地位を景虎に譲ることを約束します。憲政の関東出兵の要請を受けた景虎は、永禄2年(1559)に上洛して室町将軍足利義輝に謁見し、小田原北条氏打倒のために上杉氏を支援する約束を取り付けました。その大義名分を掲げ、翌3年に関東へと軍を発します。



No.25　関東幕注文（上杉家文書複製）

北条氏康が、古河公方に自分の甥の義氏を就任させるなどの越権行為を強めていったため、永禄3年に長尾景虎が関東に入ると、北条氏に一旦は服属していた岩付城主太田資正・忍城主成田長泰らの諸将はただちにこれに呼応し、景虎の先鋒として北条氏領へ侵攻しました。

永禄4年頃になると、関東の多くの諸将が景虎のもとに参じていたことが、その氏名を書き上げた「関東幕注文」によって判明します。相模を除く関東7カ国に255名もの武将が確認でき、武蔵国では「岩付衆」の太田資正や「武州之衆」の成田氏ら50名が名を連ねています。



No.27　上杉輝虎書状（森山家文書複製）
上杉輝虎は、羽生城主広田直繁に宛てて、北条方との和睦合意を伝え、北条方へと走るものが多い中での広田氏の忠節を賞賛しています。

北条氏康が北条氏の居城小田原城での籠城戦を選んだため、永禄4年3月、景虎は10万近い大軍をもって包囲しました。しかし、小田原城は容易には陥落せず、その攻略を断念した景虎は、翌閏3月に鎌倉鶴岡八幡宮に参拝して上杉憲政の名跡を継いだことを報告しました。これにともない、山内上杉憲政から一字を貰い、名を上杉政虎と改名、翌年上洛のみぎりに足利義輝から正式に関東管領に任じられ、その一字を賜って輝虎へと改名します。

小田原城を囲むなど北条氏に圧力を加えた上杉輝虎でしたが、忍城主成田長泰とは不和に陥り、成田氏の帰城とともに諸将も帰陣したため、輝虎もやむなく本国越後へ帰国します。しかし、反北条連合の盟主として、また関東管領としての立場を確固とすることに成功しました。

以後、上杉氏と北条氏は関東を巡って毎年のように争いましたが、関東への圧力を強めてきた武田信玄へ対抗する必要が生じたことから、永禄12年(1569)に両者は和睦(越相同盟)を結びます。北条氏政の子を輝虎の養子に迎えること、足利義氏を古河公方とし、輝虎がその補佐役である関東管領を務めること、また上野及び北武蔵を上杉方の勢力範囲と

することを条件として結ばれた和睦でしたが、輝虎は、北条方の上田氏の松山領、反目していた成田氏の忍領、太田氏の旧岩付領などは取り戻せず、逆に和睦に反対して、あくまで反北条を貫こうとする関東諸将との亀裂を生じさせる結果になりました。

武蔵の諸将は、太田氏のように反北条氏の姿勢を崩さないものから、成田氏や深谷上杉氏のように北条方へ服属するものまで、勢力争いのなかで独自の判断で身の置き所を定めていきました。

この後、出家して謙信と名乗った輝虎は、氏康の子氏政とも戦端を開きましたが、既に昔年の勢力はなく、武蔵国を含めた関東の大部分は北条氏の影響下に入りました。

エピローグ　上杉景勝と御館の乱

関東管領となった上杉謙信には実子はありませんでしたが、謙信の姉・仙桃院の子顕景（天正3年に景勝と改名）と、北条氏康の子景虎の2人の養子がいました。

謙信はいずれに跡を継がせるか明確にしないまま天正6年（1578）3月に没します。そのため、景勝と景虎の2人の養嗣子が家督を巡り、上杉家中を二分して争う「御館の乱」が起こります。

景勝方には、直江家ほか謙信時代の重臣のほか、新発田家などの有力国人衆が支援をしました。一方の景虎方には前関東管領上杉憲政、その子憲重、北条高広（山内上杉氏の重臣）ら上杉勢のほか、甲斐の武田氏、生家である北条氏の支援がありました。

No.33　鉢形城縄張図（小室家文書 6459）
鉢形城を囲む豊臣方の配置を示しています。上杉勢は城の南側に布陣しました。

当初は戦局を有利に進めた景虎方でしたが、体勢を整えた景勝方が次第に戦局を有利に運びはじめ、天正7年（1579）3月には景虎の籠もった御館が落城し、落ち延びた景虎も鮫ヶ尾城（妙高市）にて自害したため、景勝側が家督争いを制しました。

「御館の乱」の最中、景虎方に組した前関東管領上杉憲政とその子らは死没し、上杉家中は景勝によって統一されました。

乱を平定した景勝でしたが、養父謙信から関東管領を継承しなかったため、かつて鎌倉公方のもとで関東に威を誇った「関東管領」は、ここに名実ともに消滅しました。

その後の景勝は、有力国人衆新発田氏の反乱や織田信長の侵攻を跳ねのけ、信長没後は織田家中の豊臣秀吉と誼を通じました。そして、天正 18 年（1590）の秀吉の小田原合戦に従い、養父謙信の宿敵北条氏討伐のために関東の地へ出兵しました。

景勝は、鉢形城をはじめ、上野・武蔵国にある北条方の諸城を攻め落とす活躍をみせ、上杉憲政や養父謙信らの歴代関東管領が果たせなかった、関東の雄北条氏の滅亡を目の当たりにすることとなりました。

No.	資料名	文書番号	時代		装幀	展示期間
【第1部】関東管領上杉顕定の時代						
Ⅰ 関東管領と享徳の乱						
1	足利義満御内書(上杉家文書)	C7777(複製)	〔康暦元〕4.5	1379	掛幅装	通期
2	上杉朝宗施行状(黄梅院文書)	C11309(複製)	応永4.12.3	1397	掛幅装	通期
◇ 3	上杉長棟(憲実)書状	安保文書15	〔永享12〕12.6	1440	巻子装	前期
◇ 4	長尾景仲書状	安保文書17	〔永享13〕1.25	1441	巻子装	通期
◇ 5	上杉清方催促状	安保文書18	〔嘉吉元〕7.9	1441	巻子装	後期
6	足利成氏書状(別符文書)	C5554(複製)	享徳16(応仁元)11.15	1468	掛幅装	通期
Ⅱ 山内・扇谷上杉氏同族の争い 長享の乱						
◇ 7	鎌倉大草紙	小室家文書3154			冊	通期
◇ 8	上杉顕定書状	文書館収集・赤堀文書2	長享2.2.9	1488	掛幅装	通期
9	武蔵鉢形城絵図	新田家文書1			掛幅装	通期
◇ 10	鎌倉九代後記	小室家文書2525			冊	通期
◇ 11	報恩寺年譜	小室家文書2894			冊	通期
【第2部】関東管領上杉憲政の時代						
Ⅰ 揺れる古河公方家と関東管領						
◇ 12	上杉憲房感状	安保文書25	〔永正9か〕12.15		巻子装	通期
◇ 13	足利高基感状	安保文書26	〔永正9〕7.2	1512	巻子装	通期
14	足利政氏判物	龍興寺文書1	〔享禄4以前か〕7. 3		状	通期
Ⅱ 北条氏の侵攻と河越合戦						
15	北条氏綱書状(上杉家文書)	C7780(複製)	〔大永5〕3.10	1525	掛幅装	通期
16	上杉朝興書状(上杉家文書)	C7781(複製)	〔大永5〕3.23	1525	状	通期
17	三戸義宣書状(上杉家文書)	C12218(複製)	〔大永5〕3.23	1525	状	通期
◇ 18	太田道可(資頼)判物	道祖土家文書1※	8.21		巻子装	通期
◇ 19	太田道可(資頼)判物	道祖土家文書2※	〔享禄3〕10.26	1530	巻子装	通期
20	上杉憲政願文(鹿島神宮文書)	C15686(複製)	天文11.6.吉	1542	状	通期
◇ 21	上杉憲政安堵状	文書館収集・赤堀文書1	〔天文15〕4.27	1546	掛幅装	通期
◇ 22	上杉憲当(憲政)書状	三戸家文書1	〔天文16〕12.14	1547	掛幅装	通期
Ⅲ 長尾景虎から関東管領上杉輝虎へ						
◇ 23	北条氏康判物	斎藤(吉)家文書1	〔永禄3〕10.17	1560	状	前期
24	長尾景虎書状(上杉家文書)	C9333(複製)	〔永禄3〕12.24	1560	掛幅装	通期
25	関東幕注文(上杉家文書)	C10534(複製)	(永禄4年頃)		巻子装	前期
◇ 26	太田資正感状	道祖土家文書4※	〔永禄4〕7.27	1561	巻子装	通期
27	上杉輝虎書状(森山家文書)	C12220(複製)	〔永禄12〕閏5.6	1569	掛幅装	通期
28	木戸忠朝書状(上杉家文書)	C12219(複製)	〔永禄12〕7.15	1569	掛幅装	通期
29	上杉謙信書状(上杉家文書)	C9334(複製)	〔元亀4〕3.5	1573	巻子装	後期
◇ 30	梶原政景判物	三戸家文書2	〔永禄10頃〕5.18		掛幅装	通期
エピローグ 上杉景勝と御館の乱						
31	上杉景勝書状	島津家文書5	天正6.11.10	1578	状	通期
32	上杉景勝朱印状(掟書)	島津家文書27	天正10.7	1582	状	通期
◇ 33	鉢形城縄張図	小室家文書6459			切続	通期

上杉家文書　:原資料　米沢市上杉博物館蔵〔国宝〕
別符文書　:原資料　西敬寺蔵〔静岡市指定文化財〕
鹿島神宮文書　:原資料　鹿島神宮蔵〔茨城県指定文化財〕
森山家文書　:原資料　個人蔵

前期:11月 3日(金)～ 11月19日(日)
後期:11月21日(火)～ 12月10日(日)

◇は、埼玉県指定文化財を示す。
文書番号の※は、複製資料との展示替えを示す。

◆凡例

・本冊子は、平成29年11月3日～12月10日に県立歴史と民俗の博物館において開催する県立文書館主催 文書館収蔵文書展「関東管領上杉氏と埼玉の戦国武将展」の展示解説書である。
・紙幅の都合上、主要な展示資料から一部を選んで掲載した。
・本展は、県立文書館学芸主幹新井浩文が担当し、学芸員中村亮佑（平成28年度）、髙田智仁（平成29年度）が補助した。
・掲載写真は、株式会社デジタルＳＫＩＰステーション撮影によるほか、当館職員が撮影した。

◆協力者・協力機関一覧 ※五十音順・敬称略

雲洞庵　西敬寺　鉢形城歴史館　米沢市上杉博物館
米澤藩主上杉家廟所

文書館収蔵文書展
「関東管領上杉氏と埼玉の戦国武将」
展示解説リーフレット

編集・発行　埼玉県立文書館
〒330-0063 埼玉県さいたま市浦和区高砂4-3-18
電話番号　048-865-0112
発行日　平成29年10月31日
印刷　株式会社エビス